

# 「総ぐるみ」新聞

NPO 総ぐるみ福祉の会

## 西洗自治会納涼大会の模擬店に参加

去る7月24、25日の週末2日間、恒例の西洗自治会納涼大会が、第三公園で開催されました。当NPOは、昨年同様に模擬店に参加して、手づくり品の販売をしました。

今年の関東地方の梅雨は、夜にたっぷり降るものの中は曇り空が多く、全国で最も早く梅雨明け宣言が出されて、以来連日の猛暑、酷暑となりました。熱中症を発生して亡くなる方の報道が、後を絶たない中での開催となった納涼大会でしたが、スタッフ一同、水分摂取を十分心がけて、模擬店の販売にあたりました。

### ●手づくり品中心の販売品

日限山荘の開催日には、昨年の秋以来、古布を使った布ぞうりづくりが行われていました。すると、スタッフの友成さんが芯縄を大1巻き、また宮井さん、近藤さん、蓬田さん他が古浴衣地をご寄付くださり、理事の大橋さんが、折りたたみ式ぞうり編み器を5台作製して、ご寄贈くださいました。

以後、布ぞうりづくりに精を出したことは、言うまでもありません。



その他、3丁目の小室さんが業務用の編み糸、寺島さんが太い編み糸をご寄贈くださり、編物グループは帽子と花飾りつきマフラーを製作しました。また、和服地の残り布やネクタイ地、スカーフを利用した胸元の飾りチーフ、バックの中をかき回さずにすむひも付き鍵ホルダー、かわいい動物の形のピンチ人

NPO 総ぐるみ福祉の会事務所は日限山4・44・23（八四四一七四七七）  
入会や活動のお問い合わせ先は、事務所または「日限山荘」日限山4・7・1

形(カーテン止め)、紙紐製の手かご、ビーズ製の腕輪等を日限山荘の開催日や自宅で作成して、販売する数をそろえました。  
一方、花などを描いた皮製の小銭入れ、携帯電話などにつけるひも状の飾り、かわいい苺形の飾り物、編物製のペットボトル入れ、袋物、アクリルたわしなど、手づくりのご寄贈品も数多くありました。

### ●売り上げご協力に、御礼申し上げます

好天に恵まれ、2日目には夕立の予報が出ていたにもかかわらず、雨に降られることはありませんでした。

日中の暑さが和らぐ4時過ぎから、地域の方々が次々にのぞいてくださり、まず布ぞうりは初日で完売となり、2日目にお見えになった方からは、予約までいただきました。  
毛糸編みのマフラーは、この猛暑のせいで完売とはいきませんが、お子達にも買っていただけの品が昨年よりあって、売上高は六万九千四百十円でした。皆様方のご協力に、心より厚く御礼申し上げます。

### 日限山荘の開催

8月中お休みをいただいた日限山荘ですが、9月3日(金)より、通常通り、火曜日と金曜日に、昼食を用意して皆様のお越しをお待ちしております。

古和久幸先生を囲んで  
「死生観」について茶話会を開催

昨年の9月に、「老いを生きる知恵」と題するご講演をいただいた十慈堂病院の院長（医博）古和先生を囲んで、表記の茶話会を2回（3月8日、8月6日）、日限山荘で行いました。また、同一テーマで、会員のみの茶話会を4月9日に行っています。

【古和先生のお話の概要】

◆死生観とは

私達は、日頃は死を意識することもなく、日々元気で、家庭円満、楽しく歳を重ねて生きていきたいと願っています。しかし、私のように余命10年と告知されたら、死を意識せざるを得ません。つまり、死を意識してすぐ新たな人生観を、死生観といっています。

◆武士は死を意識して生きた

新渡戸稲造は、アメリカと日本の架け橋になることを願い、英文で執筆した『武士道』に「武士道の根幹思想は常住死身で、江戸時代の日本人にとって死は常に身近にあり、武士の生死は時の権力者ににぎられていた」と述べています。つまり、戦国時代以降、太平洋戦争中までは、武士も兵士も一般の人々も、死を意識して生きていたといえます。

◆死を意識しない現代の人々

太平洋戦争が終わって、平和な日々が65年続く日本に住む現代の私達は、日常死を意識せずに生きています。しかし、死は誰にでも必ず訪れるし、避けて通れません。一昔前まで、人生50年といわれていましたが、今や世界でも有数の長寿のわが国は、人生80〜90年という時代になりました。

限りある人生を、死を意識して、死をどのように受け止めて、老いの身を生きていくのが、今や私達に問われているのでしよう。

◆葬送は文化である

インドやネパールでは、遺体を川辺で焼却して川に流していますし、バリ島では、鳥葬といって、遺体を山に運んで鳥についばませています。火葬が一般的になったわが国でも、沖縄・奄美地方では、戦前までは土葬にして、遺体が朽ちた後に洗骨してから、一族の共同墓に収めるといふように、死を弔う方法はさまざまで、民族の文化といえるでしょう。

◆医療には限界がある

人間は、心臓や呼吸が停止すると死に至りますが、人工呼吸器の開発によって、植物状態になっても、生きながらえることが可能になりました。医者は、患者を1分でも1秒でも長く生かすことが使命といわれています。医療は日進月歩ですが、最新の治療や新薬には必ずリスクが伴うし、医療は患者をすべて治すことはできません。

◆宗教の役割

生きていく上で、気持ちの安らぎを得るために、世界中のほとんどの人々は、信じる宗教をもっているように思います。日本では、信じる、信じないにかかわらず、葬式を仏式で行う人が多いのです。しかし、現在の日本の仏教には、問題もあるように思えます。たとえば、法要の際に読まれる「お経」は、梵語で書かれており、その意味・内容を聞いて判る日本人はいない状態です。お経の意味を電子掲示で流すなど、お寺やお坊さんは、もつと努力する必要があります。また、牧師同様に病院に向いて、患者の相談

に応じたらよいと思うのです。医学部においても、宗教に関する講義があつてしかるべきと、医師を長く続けている私は思っています。

【4月9日の会員茶話会で出た意見】

- 終の棲家を種々見学したが、有料老人ホームの入居には大金がいるし、自宅で長く過ごす方法を考える必要がある。
- 1人暮らしが15年になるが、百歳まで楽しく、元気で生きたい。
- 「生まれてきたことは幸せ」と考え、家族を大切にして、充実した人生を送りたい。
- 自宅で3人の老人を看取ったが、優しい言葉をかけて、毎日楽しく過ごさせた。
- 人工呼吸器をつけてまで、生きていたくないので、夫と尊厳死宣言を書いた。
- 今後1人暮らしが多くなると思われるので、奥様方がレストランを開いてほしい。
- 娘と同居であるが、元気で出来る間は、料理でも孫のお守りでも何でも手伝う。
- 最近娘の所へ転居してきたが、いぶき会や総ぐるみ福祉の会に入って毎日が楽しい。
- 大家族で暮らさなくなつた現在、親子間や孫を含めた家族のきづなを強める努力が、ぜひとも必要である。

【家族と確認する必要がある事柄】

健康で長く生きたいと願っていても、歳をとると病気になるったり、障害が出たりして、介護が必要な状態になります。そこで、元気なうちに、在宅介護か、どこか施設に入るのかという介護についての希望、また、万一死去したときの葬式のやり方、知らせる範囲、墓や遺産相続等について、家族で話し合っておく必要のあることを、今回強く感じました。